

形式語の文法化

日 野 資 成

1 はじめに 形式語とは何か

形式語とは何だろうか。定義してみよう。形式語とは、意味的には、「実質的意味がなく、形式的意味だけを持つ語」（松下1974：224, 272ページにもとづく）であり、文法的には、「自立語として一文節を構成する形式を持ちながら、一方で付属語として機能し、他の語とともに一文節を構成する語」（森岡2001：161-162頁にもとづく）である^註。形式語には、「くらい」などの形式名詞と「(て)いる」などの形式動詞がある。それぞれを使った例文を挙げる（「/」は文節の切れ目を指す）。

(1) 三段跳びくらい/足腰に/負担の/かかる/種目は/ない。

(2) 太郎は/運動場を/走っている。

(1)の「くらい」は、「三段跳び」に付属して一文節を構成する形式名詞、

(2)の「いる」は、「走って」に付属して一文節を構成する形式動詞である。

意味としては、(1)の「くらい」程度を表し、「ほど」という形式的意味を表すのみであり、(2)の「いる」は継続のアスペクトという形式的な意味を動詞「走る」に添えるのみである。一方、「くらい」「いる」は自立語にもなる。

(3) 位が/高い。

(4) 教室に/太郎が/いる。

(3)の「位」は、「地位」という実質的意味を持ち、付属語「が」とともに一文節を構成する実質名詞、(4)の「いる」は、「存在」という実質的意味を持

ち、単独で一文節を構成する実質動詞である。

2 形式語の先行研究

山田（1908）は、代名詞と数詞を形式体言とし（179ページ）、形式用言の中に「あり」を含める（335ページ）など、現在一般的になっている付属語としての形式語とは異なる扱いをしている。松下（一九七四）は、形式的意義を持ち付属するという形式語の定義を明確にし、その語例も多いが、形式名詞・形式動詞ともに、その分類は羅列的で体系的ではない（241-250, 283-301ページ）。時枝（1950）では、形式名詞、形式動詞ともに羅列的であり（75-83ページ）、橋本（1959）でも、形式名詞の用例も少なく、羅列的である（77-79ページ）。佐久間（1952）は形式名詞を吸着語と名づけ、「前に来る語句に何かの品詞の資格を与える」（325ページ）という文法的機能を形式名詞に認め、多くの語例を意味によって詳細に分類した（328-345ページ）が、この分類も羅列的であった。森岡（2001）は、佐久間（1952）の吸着語論をもとに、接続と文法的機能（体言化、あとへの接続）によって、形式名詞を以下のように八つに分類した（163-174ページより）^{註2}。

1 接尾辞的用法（名詞につく）

鯨ほどの大きさ、一回ぐらいは、その場かぎりの

2 補助的用法（連体語につく）

驚くほど、見るかぎり、本のとおり、その場の、あのほう、こんな具合に

3 準体助辞的用法（連体形につき、前の節を体言化する）

「雨はまだ上がる」けしきがない。「偽物を売り歩く」くらいの男であるから、

4 副助辞的用法（助詞につく）

私にだけ（ばかり、まで）、何とやら変だ、働いてばかりいる

5 準副助辞的用法（連用形につく）

歩きながら考える。遊びがてら編み物をする

6 接続助辞的用法（連体形につき，後に接続する）

「本家の方を急がしてみた」ところ，大体依存がないらしい。

「犯罪者とよばれぬ」どころか，逆に世の勝利者と称されている。

7 終助辞的用法（判断辞の終止形につく）

きれいなお部屋だこと。

普段一日も休んでいないんですもの。

8 情態言的用法「よう」「そう」

「急に人が変わった」ように，

「絵には余り関心をもってい」そうにない主人

この分類は，純粹に文法的機能によるという点で首尾一貫している。文法化（自立語が時代とともに次第に付属語になる過程）の観点からも，6のような接続機能を持つ語への変化（Traugott 1982: 257による「テキスト的 (textual)」機能），7のような主観的機能を持つ語への変化（同，「表現的 (expressive)」機能）など興味深い。また，同じく文法化という観点からは，1，2，3，4の用法をすべて持つ語である「だけ」「ばかり」「ぐらい」に注目する。体言に準じる3の用法から，もともとは名詞であったことが考えられ，歴史的な過程で，1，2，4のような用例が現れたと考えられるからである。そこで今回は，まず形式名詞については，「だけ」「ばかり」「ぐらい」の文法化の過程をたどることとする。

次に，形式動詞については，接続によって次の三つに分類する（日野2001，森岡2001より）。

1 動詞連用形に続くもの

～あう，～あがる，～あげる，～入れる，～おこす（遣す），～かえす，
～だす，～たてまつる，～たてる，～たまふ，～つく，～つける，～つめる，
～とおす，～とる，～まうす，～やる（遣る），～わける，～わたる

2 助詞「て」に続くもの

(て)あげる，(て)いく，(て)いただく，(て)いる，(て)おく，(て)くださる，
(て)くる，(て)くれる，(て)さしあげる，(て)しまう，(て)みる，(て)

もらう, (て)やる,

3 助詞「と」「に」「を」に続くもの

(に)あたって, (と)いう, (とは)いえ, (に)おいて, (と・に)して・(と・に)しては・(と・に)しても・(に)しろ・(と・に)する・(と・に)する
と・(と・に)すれば・(に)せよ, (に)ついて, (に)つけて, (と・に)なる・
(と・に)なると・(と・に)なれば, (を)もって, (に)よって, (に)わたって
これらのうち, 今回は, 文法化とともに, 抽出化という共通の意味変化を見ることができるという点で, 敬意を表す補助動詞「～たまふ」「～まうす(申す)」と方向を示す「～やる(遣る)」を取り上げて検討する。

3 形式語の文法化

はじめに形式名詞「だけ」「ばかり」「くらい」, 次に形式動詞「～たまふ」「～まうす」「～やる」の文法化について検討する。

①形式名詞「だけ」の文法化

「だけ」の語源は, 名詞「たけ(丈)」である。「たけ」は平安時代には, 人の「身長」を表した。

(5) 筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに (伊勢物語23段 951年ごろ)

(筒のような丸い井戸の囲いと比べてきた私の背丈は, あなたが見ないうちに囲いの高さよりも高くなってしまったようですよ)

この「たけ」(身長)は, 頭のとっぺんから足の裏までの限られた物理的長さを表すが, 鎌倉, 室町時代には, 「たけ」は心理的に限られた心の範囲を表し, 「限り」の意味で使われるようになる。

(6) もの思ふ心のたけぞ知られぬる夜な夜な月をながめ明かして (山家集・中 1190年)

(物思いにふける心の限りが自然と知られた。毎夜月をながめて夜を明

かしていると)

(7) 我が意の思たけをすきとせうすものとは云たぞ（史記抄16・酷吏列伝
1477年）

（私の心の思かぎりを好きと称すものと言ったぞ）

さらに、江戸時代には、活用語の連体形を受けて、時間的に限られた範囲も表すようになる。

(8) 命生きやうと思ふて此の大事が成る物か。生きらるるたけ、添はるる
たけ、たかは死ぬると覚悟しや（冥途の飛脚正徳元（1711）年）

（命を生きながらえようと思つてこの大事が成し遂げられるものか。生きられる範囲内は生き、添い得る範囲内は添おう。究極は死ぬものだと覚悟せよ）

同様に、活用語の連体形を受け、「だけ」に音韻変化した用例も、江戸時代には現れる。

(9) 伊勢路へ向けて、のがるるだけはのがれて見ん（博多小女郎波枕 享
保3（1718）年）

（伊勢路へ向けて、逃れる限りは逃れて見よう）

この「たけ」から「だけ」への音韻変化は、「たけ」が直前の語の連体形に付属して文法化した証拠である。さらに、名詞に付く用法も現れはじめる。

(10) 不調法が有つても親だけで済めども、人の子にはな、義理もあり情
もある（平假名 盛衰記、第三 元文5（1740）年）

この名詞に付く用法は、江戸時代には極めて少なかったが、現代では頻繁に使われている。

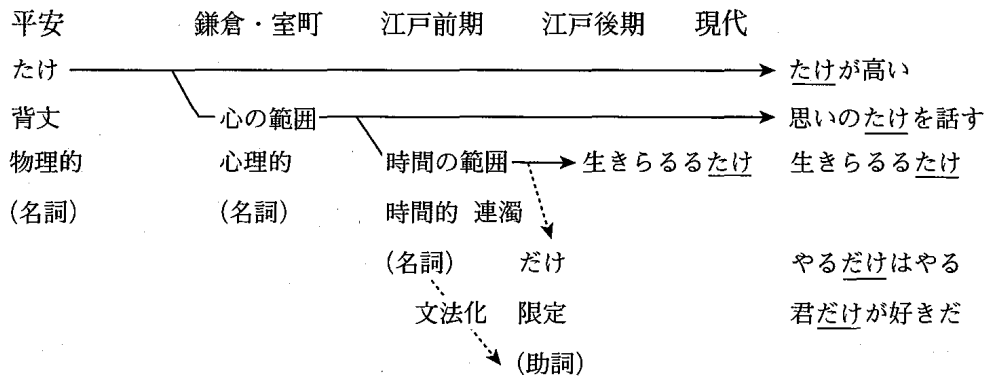
(11) 千円だけ貸してください。

(12) あの人だけにはいいたくない。

この「だけ」は限定を表す副助詞である。このように、自立語の名詞「たけ」は付属語の副助詞「だけ」に文法化した。同時に、「背丈」という実質的意味も失われ、「限定」という形式的意味のみを表すようになった。この「たけ」の文法化は、(8)のように「たけ」が活用語の連体形に付くように

なったのがきっかけである。これによって、(9)のように「だけ」に音韻変化し、付属語の「だけ」ができたのである。「だけ」の文法化を図で示す。

図1 「だけ」の文法化



この図は、物理的「背丈」を表す「たけ」と、「思いのたけ」など心理的「心の範囲」を表す用法は、名詞として現在まで継続して使われているが、名詞として時間の範囲を表す「生きるるるたけ」の用法は現在はないことを示す。また、名詞「たけ」が連濁で「だけ」になったとき、自立語「たけ」が付属語の助詞に文法化したことを示す。

②形式名詞「ばかり」の文法化

「ばかり」の語源は、動詞「はかる」(推し量る)といわれている。その証拠となる例を挙げる。

(13) いづかたに求め行かむと門に立ちて、と見かう見けれど、いづこを
はかりとも覚えざりければ、(伊勢物語21段 951年ごろ)

((男は女を) どちらの方向に探し求めて行こうかと、門に立って、あちこち見たけれど、どこを見当にしたらいいかもわからなかったので)
この「はかり」は、「都となしつ」のように名詞につく引用の助詞「と」が続くので名詞性が強い(「はかり」は動詞「はかる」の連用形が名詞化した形式)。しかし一方で、「はかり」は目的語「いづこを」を取っているので動詞性も保たれている。さらに、次のような例も現れる。

(14) いとど人目も見えず、さびしく心細くうちながめつつ、いづこばかりと、あけくれ思ひやる（更級日記・子忍びの森 1060年）

（（父が留守になって）いっそう人目も遠ざかり、さびしく心細くぼんやり物思いにふけりながら、父は今どのあたりまで行っているかと、明けても暮れても思いやる）

(13)と(14)の例はどちらも、「(人を探して)どこにいるのか推し量る」という文脈で共通し、(13)の「いづこをはかりと」が、(14)で「いづこばかりと」になっていることから、助詞「を」がなくなった結果、連濁で「いづこばかりと」になったという歴史的過程を見ることができる。この「はかり」から「ばかり」への音韻変化は、名詞「たけ」が助詞「だけ」になったのと同じく、もともとの動詞「はかる」が名詞に付属する語に文法化したことを示す証拠である。

このように、「ばかり」は動詞「はかる」（おおよその見当をつける）から派生した語であるので、平安時代には、数字に付いて、おおよその見当を表す例が見られる。

(15) 翁、今年は五十ばかりなりけれども（竹取物語・かぐや姫の昇天 894年ごろ）

（おじいさんは、今年五十歳くらいであったけれども）

(16) 八月一五日ばかりの月に出で居て、かぐや姫いといたく泣き給ふ（竹取物語・かぐや姫の昇天）

（八月一五日ころの月においでなさって、かぐや姫はひどくお泣きになる）

この「ばかり」は、数字を特定しない（焦点が定まらない）ぼかした表現である。これは、もとの「はかる」という動詞が、「おおよそのことを推し量る」という点で焦点が定まらないことから来ている。この「はかる」は心で推し量るという意味であるが、一方、「はかる」には「道具を使って測定する」という具体的意味もあった。測定することによって、たとえば長さであれば一メートルというように、対象が明確に限定されることから、平安時代

の「ばかり」には、名詞に焦点を当てて限定を表す用法も現れる。

(17) 月影ばかりぞ八重葎にもさはらずさし入りたる (源氏物語・桐壺 1014年ごろ)

(月の光だけが、八重葎にも支障なく差し込んでいる)

この用法は、鎌倉時代にはさらに多くなる。

(18) 舟ながら今夜^{こよひ}ばかりは旅ねせん しきつの浪に夢はさむとも (新古今916 1205年)

(19) みちのべの蛸ばかりをしるべにて ひとりぞ出づるゆふやみの空 (新古今1952)

鎌倉時代には、連体形につく限定の「ばかり」も現れる。

(20) 歎きつつことしも暮れぬ露のいのち いけるばかりを思ひ出にして (新古今695)

室町時代には、次のような、誇張の用例が現れる。

(21) さればその方が来たことも、ただ夢とばかり思ふ (天草本平家)

(だから、あなたが来たことも、ただもう夢ではないかとひたすら思う)

これは、鬼界が島に流された俊寛が、かつて俊寛に童として育てられ、俊寛を主として慕い、はるばる鬼界が島にやってきた有王に言ったことばである。俊寛は身も心も疲れ果て、夢も現実もわからないほどで、有王が来たことも、ただひたすら夢に違いないと思っている、という文脈であるので、「ただひたすら」という誇張の意味で使われている。

(22) 野も、山も、海も、川も武者ばかりでござる (天草本平家)

(野も山も海も川も、どこもかしこも武者ばかりでございます)

これは、頼朝の軍勢が平家に比べて圧倒的に多いのを誇張した表現である。この「ひたすら」という意味の誇張の用法は、江戸時代に入るとさらに多くなる。

(23) 声色ばかり使ってをりますぜ (浮世床 1813年)

(24) ほらばかりふいているだ (浮世床)

「ばかり」は(23)では「使う」、(24)では「ふく」という動詞にかかり、誇張を表している。

同じ文脈で「ばっかり」という形も現れる。

(25) 唐のことばっかり探して足もとの事に疎いだの（浮世床）

(26) うそばっかり（浮世床）

促音「っ」の一拍分が加わると、「れき（歴）とした」が「れっきとした」になるように、もとの意味が強まる。したがって、この「ばっかり」は誇張を表していることがわかる。

最後に、現代の用例をいくつか挙げる。

(27) 十時間ばかりかかる。

(28) 太郎ばかりが悪いわけではない。

(29) 酒ばかり飲む。

(27)はおおよその見当、(28)は限定、(29)は誇張を表し、どれも前の時代から引き継いでいる用法である。現代には、このほかに、次のような用法がある。

(30) 運び出すばかりになっている。

(31) 太郎は今出発したばかりだ。

(30)はこれから始まるという開始のAspect、(31)はすでに終わってしまったという完了のAspectを表す。(30)は「運び出す」、(31)は「今出発した」に焦点が当てられている点で限定の「ばかり」の流れを受けている。さらに、「ばかりに」「ばかりか」という固定した形も現れる。

(32) ちょっと油断したばかりに、テストで悪い点を取ってしまった。

(33) タレントのA君は、女性ばかりか男性にも人気がある。

(32)は節を受けて原因を表し、後の節につながる接続詞として使われる。

(33)は後に対比的に添加される語が続く。どちらも前後をつなぐという接続の機能を持つ新しい用法である。「ばかり」の文法化を図で示す。

図2 「ばかり」の文法化

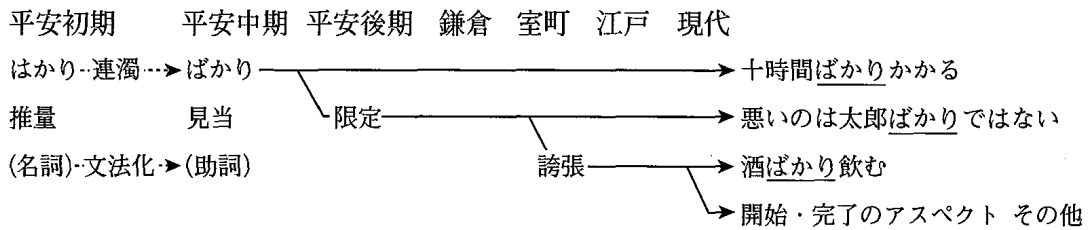


図2も、名詞「はかり」が連濁で「ばかり」になったとき、自立語「はかり」が付属語の助詞に文法化したことを示す。

③形式名詞「くらい」の文法化

「くらい」の語源は、名詞「位」である。「位」は、平安時代までは皇位など身分にもとづく「地位」を表した。

(34) 身の病重きにより、おほやけにも仕うまつらず、くらゐをも返し奉りて侍る (源氏・須磨)

((源氏は) 自分の体の病が重いので、公にもお仕え申し上げず、地位もお返し申し上げました)

「位」は、鎌倉時代、室町時代になると、芸道上の到達した境地（芸位）を表すようになる。

(35) 堪能のたしなまざるよりは、終に上手の位にいたり (徒然草150段)

((芸は未熟でもひたすら努力をする人は) 才能はありながら稽古に精を出さない人よりは、最後には名人の境地に至り、)

(36) 初心の時は、只打向ひて、一首さはさはと理の聞こゆるやうに詠むべき也。其の位にも至らずして達者のまねをすれば、をかしき事出でくる也 (正徹物語・上)

((歌詠みの) 初心者のときは、ただ硯に向かって、一首はつきりと筋道立って聞こえるように詠むべきである。その境地にも至らないで達人のまねをすると、ちぐはぐな歌が出てくるのである)

「くらゐ」は(34)のように節頭に現れたり、(35)のように助詞「の」につく

ときは、明らかに「地位」という意味の名詞である。しかし、(36)の「そのくらいにも至らずして」のように「その」につくようになると、「そのくらい」で「その程度」という解釈をする余地ができる。その結果、江戸時代（17世紀）になると、おおよその程度を表す用法が現れる。

(37) かしらを結えば、十くらゐも二十くらひもうつくしう見ゆると申すが、さやうにもあらう事じゃ（虎明本狂言・鏡男 寛永19(1642)年）

（髪のを結べば、十歳くらいにも二十歳くらいにも美しく見えるというが、そういうこともきっとあるにちがいない）

(38) 越前の国主を梅永刑部殿と申すは、某と同年位と聞く（歌舞伎・傾城仏の原・一 元禄12(1699)年）

（越前の国主の梅永刑部殿と申すお方は、私と同い年と聞いております）

江戸時代（18世紀）には、軽い程度を表す用法も現れる。

(39) なまなか茶漬けぐらゐなら、いつそ戻つて寝てくれふ（浄瑠璃・今宮の心中 宝永7(1710)年）

（なまじっか茶漬け程度だったら、いっそ家に帰って寝てしまおう）

(39)では、「くらい」が連濁で「ぐらい」になっている。これも、「だけ」「ばかり」と同じく、「くらい」が前の語に付く付属語として文法化した証拠である。

おおよその程度や軽い程度を表す用法は、現代でも受け継がれている（現代は「くらい」と「ぐらい」のどちらの形でも言える）。

(40) あの人は23歳くらいでしょう。

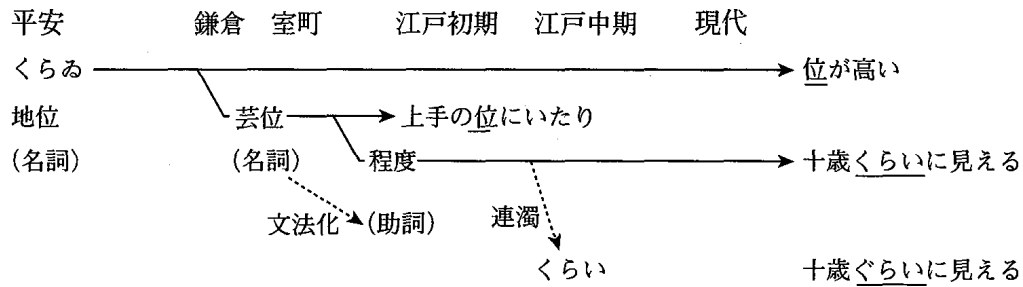
(41) 風邪くらいたいしたことはありません。

現代では、非常に高い程度を表す用法も現れる。

(42) エベレストぐらい高い山はない。

この場合、必ず後に「ない」などの打消しの語を伴う。「くらい」の文法化を図で示す。

図3 「くらい」の文法化



「地位」の意味の名詞「位」は現在まで継続して使われているが、「芸位」の意味はなくなった。「くらい」の場合、(37)のように名詞に付いて助詞として文法化したあとに、(39)のように連濁「ぐらい」が現れたが、現在でも、「くらい」と「ぐらい」の両方の形式があり、一定していない。

ここまで、形式名詞「だけ」「ばかり」「くらい(ぐらい)」の文法化を論じてきた。これらに共通するのは、まず連濁による音韻変化であり、(8)の「たけ」が(9)で「だけ」に、(13)の「はかり」が(14)で「ばかり」に、(38)の「くらい」が(39)で「ぐらい」になっている。これは、それぞれが名詞から助詞に文法化した証拠である。次に、もとの語「丈」(背丈)、「測り」(測定すること)、「位」(地位)の意味に共通しているのは、高い・低い(長い・短い)の度合い(程度)があることである。現在、その意味は希薄化しているが、それぞれ程度副詞として使われているのはそのためである。その「程度」の中で、最小限の程度を表す用法は、それぞれ現在にも共通して生きている。

(43) せめて少しだけでもお手伝いさせてください。

(44) わずかばかりの品物ですが、どうかお納めください。

(45) 私の英語は、ぺらぺらではありませんが、少しぐらいなら話せます。どれも、相手を気遣いながら自己をやんわりと主張するという日本人らしい用法である。

④形式動詞「～たまふ」の文法化

「賜ふ」はもともと、奈良時代には「与ふ」（与える）の尊敬を表す動詞として「くださる」の意味で使われていた。

(46) 草枕 旅の翁と 思ほして 針そ賜へる 縫はむものものが (万葉集 4128)

(私を旅のおじいさんとお思いになって、針をくださった。何か縫うものはなないか)

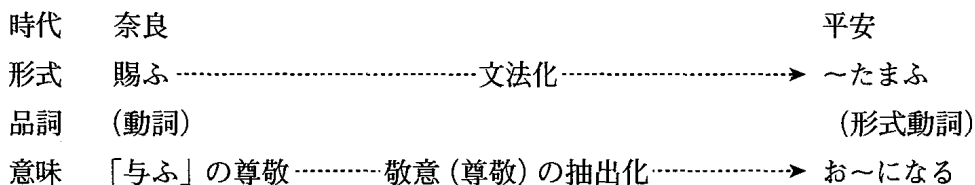
しかし、平安時代には、動詞に付いて補助動詞として使われるようになる。

(47) みかどにはかに日を定めて御狩に出で給うて... (竹取物語・御門の求婚)

天皇は、急に日を定めて、御狩に外出なさって、

(46)の動詞「賜ふ」は(47)では補助動詞「～たまふ」に文法化し、「～なさる」という尊敬の意味を「出づ」（外出する）という動詞に添えている。「給ふ」は「与ふ」の尊敬語で、「与える」という動作とともに尊敬も表す語である。「おきな」は針をくれた人に敬意を払ってこの語を使っている。一方、補助動詞「～たまふ」は動詞「給ふ」から敬意の意味だけを抽出し、「みかど」の行為「出づ」（外出する）に尊敬の意を添えている。「たまふ」の文法化を図で示す。

図4 「～たまふ」の文法化



⑤形式動詞「～まうす」の文法化

「申す」はもともと、奈良時代には、「言ふ」の謙譲を表す動詞として使われていた。

(48) 住吉の我が^{すみのえ}が^あ皇神^{すめかみ}に幣^{ぬさまつ}奉り祈り申して，(万葉集4408)

住吉の社の神に幣を奉り，祈りを申し上げて，

この動詞「申す」は、「言う」という動作を表すだけでなく，作者（防人）が自分自身を低める謙讓の意味を含んでいる。

一方，平安時代になると，「～申す」という補助動詞の用法が現れる。

(49) ただ責めに責めまうし... (枕草子138段)

(一条帝の乳母の藤三位繁子は，一条帝と中宮定子を) ただ責めにお責め申して，

この補助動詞「～まうす」は，藤三位の「責む」という動作に謙讓の意味「～申す」だけを添え，藤三位を低めている。というのは，ここで彼女が責めている相手は，彼女よりも身分の高い天皇とその皇女だからである。ここでも，補助動詞「～まうす」は，「言う」の謙讓の動詞「申す」から謙讓の意味だけを抽出している。「～まうす」の文法化を図で示す。

図5 「～まうす」の文法化

時代	奈良		平安
形式	申す文法化.....	→ ~まうす
品詞	(動詞)		(形式動詞)
意味	「言ふ」の謙讓敬意(謙讓)の抽出化.....	→ お～申し上げる

⑥形式動詞「～やる」の文法化

「遣る」はもともと，奈良時代には「行かせる」という意味の動詞であった。

(50) わが背子を 大和へやると さ夜ふけて 暁露に 我が立ち濡れし
(万葉集105)

私の恋人（大津皇子）を大和へ行かせるために，夜が更けたころに，暁の露に私は立ち濡れたことだ

こ動詞「遣る」（行かせる）は，行く人（大津皇子）の，中心点（ここは，作者の大伯皇女）から他の場所（ここは，大和）への方向性を伴う動作を表

す。

しかし、平安時代には、動詞に付いて補助動詞として使われるようになる。

(51) かの女，大和の方を見やりて…（伊勢物語23段）

あの女は，（自分がいる高安から）大和のほうを見やって，

(51)では動詞「遣る」が補助動詞「～やる」に文法化している。補助動詞「～やる」は「見る」という動作が，中心点（ここは「かの女」）から他の場所（ここは，「大和」）へ向かうという方向性を表している。つまり，補助動詞「～やる」は動詞「遣る」から，方向性の意味（中心点から他のものへ）だけを抽出したのである。「～やる」の文法化を図で示す。

図6 「～やる」の文法化

時代	奈良		平安
形式	遣る	……………文法化……………	～やる
品詞	(動詞)		(形式動詞)
意味	行かせる	……………方向性(内から外)の抽出化……………	(内から外へ)～する

ここまで，形式動詞「～たまふ」「～まうす」「～やる」の文法化について論じてきた。これらと，もとの動詞「給ふ」「申す」「遣る」との関係は，どれももとの動詞の意味の一部を抽出していることである。まず，「～給ふ」は動詞「給ふ」から尊敬の意味だけを抽出し，「～申す」は動詞「申す」から謙譲の意味だけを抽出し，「～やる」は動詞「やる」から方向性の意味（中心点から外へ向かう）だけを抽出している。これらの形式動詞はすべて，もとの動詞の意味の一部を抽出したといえることができる。

4 おわりに

以上，今回は形式名詞，形式動詞ともに三つを取り上げて論じてきた。その共通点は，もともと自立していて実質的な意味を持っていた語（名詞，動詞）が，他の語に付属して形式的な意味を持つ語（形式名詞，形式動詞）に

至る，文法化の過程を経ているということである。しかし，形式名詞，形式動詞といわれる語は，1節で示したようにまだ数多くある。それらの語についても，歴史的変化をたどっていくことが今後の課題である。

参考文献

- 佐久間鼎 現代日本語法の研究 1952年 恒星社厚生閣
時枝誠記 日本文法口語篇 1950年 岩波全書
橋本進吉 國文法體系論 1959年 岩波書店
日野資成 形式語の研究 2001年 九州大学出版会
松下大三郎 改選標準日本文法 1974年 勉誠社
森岡健二 要説日本文法体系論 2001年 明治書院
山田孝雄 日本文法論 1908年 寶文館

Traugott, Elizabeth Closs. 1982. From propositional to textual and expressive meanings ; some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization. In Winfred P. Lehmann and Yakov Malkiel, eds., *Perspectives on Historical Linguistics*, 245-271. Amsterdam : Benjamins.

用例引用文献

- 源氏物語評釈 玉上琢彌 1964年 角川書店
洒落本・滑稽本・人情本 日本古典文学全集 1971年 小学館
新古今和歌集 日本古典文学大系 28 1958年 岩波書店
竹取物語・伊勢物語・大和物語 日本古典文学大系 9 1957年 岩波書店
徳川時代言語の研究 湯澤幸吉郎 1955年 風間書房 (8), (9), (10), (39)を引用
土左日記・かげろふ日記・和泉式部日記・更級日記 日本古典文学大系 20 1957年 岩波書店
日本国語大辞典 1973年 小学館 (6), (7), (37), (38)を引用
日本文法大辞典 松村明編 1971年 明治書院
ハビアン抄キリシタン版平家物語 1966年 吉川弘文館
方丈記・徒然草 日本古典文学大系 30 1957年 岩波書店
枕草子 日本古典文学大系 19 1957年 岩波書店
万葉集 訳文篇 1972年 塙書房

- 注1：森岡（2001）による形態論の立場からの術語「語基」を，ここでは一般的に「語」に代えた。また，「一成分」を「一文節」に代えた。森岡による「成分」は，「頼んでみる」を二文節で一成分とみるなど，「文節」よりも大きい単位であるが，筆者は「頼んでみる」を一文節と見る。「みる」は「試みる」の意味で，「見る」の実質的意味が失われているからである。(2)の「走っている」の「いる」も存在という実質的な意味が失われた形式動詞と解釈し，「走っている」を一文節とした。
- 注2：森岡（2001）による八分類は，さらに下位分類されているが，ここでは省き，殊にそれぞれの形式語が何に接続するかに注目した。そこで，8の「よう」「そう」は接続する形によって，たとえば，「急に人が変わったように」は連体形につくから3に，「絵には余り関心をもってい そうにない主人」は連用形につくから5に含めるなどして，省くことができる。